

ISSN 2758-8602

ちひろ美術館・東京

美術館だより

No.227

2026.2.16



# ちひろ いつもとなりにー子どもと動物ー

●2026年3月1日(日)～ 5月10日(日)

主催：ちひろ美術館

ちひろは、身近にいる子どもや動物をやさしいまなざしで見つめ、描き続けました。本展では、動物とふれあう子どもたちが描かれた作品を、ちひろの動物にまつわる思い出とともに紹介します。

## 子どもによりそ動物たち

1950年代から1960年代半ば、ちひろは絵雑誌を中心に活躍しました。この時期に描かれた作品には、子どもと動物の日常をテーマにしたものが多くあります。犬といっしょに散歩をしたり（図1）、家で猫と留守番をしたり。子どもが、相棒のような動物と過ごすしあわせな時間が、あたたかな色彩で表現されています。

## 動物との思い出



图2 暖炉の前で猫を抱く少女 1971年

幼いころから、ちひろのそばには動物がいました。少女時代のちひろは「もっと猫の意思を尊重してあげなさい」と妹に注意するほど、飼い猫をかわいがっていたといいます。猫の生態を近くで観察した経験は、のちの作品にも活きてています。たとえば、『暖炉の前で猫を抱く少女』（図2）に描かれた猫は、岩崎家の黒猫「おさき」がモデルとされています。女の子のセーターに爪をたて、画面手前の毛糸玉をじっと見る表情はユーモラスでかわいらしく、親しみが感じられます。

ひとり息子が生まれた翌年の1952年、ちひろは東京・練馬に家を建てます。亡くなるまでの22年間を過ごしたこの場所で、ちひろはさまざまな犬と暮らしました。そのなかで最も長生きしたのがチロです。夫・善明がもらってきた、この白い雑種犬を、ちひろは溺愛しました。アルバムに残された写真には、アトリエや庭で家族とくつろぐチロのようすが収められています（図3）。

チロと過ごした日々は、ちひろの作品にも反映されています。絵本『ぼちのきたうみ』では、おばあちゃんの家で夏休



图1 「りこうな いぬだから」 1963年

みを過ごす少女が、愛犬ぼちの到着をまちわびるようすが描かれています。少女と小犬がじゃれあう姿を大胆な筆づかいでとらえた絵からは、ちひろが日常的に犬の動きを観察していたことがうかがえます（図4）。熱海に逗留してこの絵本をつくったちひろは、チロを練馬の自宅に置いていかなければなりませんでした。「ポチの絵を描きながら、私はときどき家にまっている14歳の白い老犬のことを思い出しておりました」ということばからも、ちひろがチロに注いだ愛情が伝わってきます。



图3 いわさきちひろと愛犬チロ アトリエにて 1971年



图4 少女と小犬「ぼちのきたうみ」(至光社)より 1973年

## ちひろと小鳥

絵本『ことりのくるひ』では、「小鳥がほしい」という思いが芽生えた少女の心情が、余白を活かした絵と短い文で展開されています。物語の最後、逃してあげた小鳥がなかまを連れてやってくる場面で、ちひろは小鳥と少女が見つめあうようすを、やわらかな筆致で描きました

（図5）。桃色に染まった少女の頬から、小鳥と再会できたよろこびが感じられます。



图5 窓辺の小鳥と少女「ことりのくるひ」(至光社)より 1971年

この絵本は、至光社の編集者・武市八十雄氏が、自宅の窓辺に飛んでくる野鳥の話をちひろに語ったことから構想が練られました。ちひろの家にも、同じように野鳥が訪れることがあったといいます。鳥が飛んでくると、ちひろは仕事の筆を休めて、飛び立つまでのようすをじっとながめていたそうです。小鳥と心を通わせる少女に、ちひろは自身の姿を重ね合わせたのかもしれません。

『ことりのくるひ』で小鳥の描写に自信を得たちひろは、1971年から晩年にかけて、小鳥を描いた秀作を次々に生み出しました。展示室4では、小鳥をモチーフにした代表作（図6）やカットを多数紹介し、ちひろが描く鳥たちの魅力に迫ります。

(横山夢亜)



图6 海辺の小鳥 1972年

# 生誕120年『てぶくろ』の画家ラチョフと民話絵本の世界

●2026年3月1日(日)～5月10日(日)

主催：ちひろ美術館 協力：Vladimir Turkov、岩波書店、偕成社、福音館書店、日本ロシア語情報図書館  
後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

ウクライナ民話絵本『てぶくろ』で知られるエフゲーニー・ラチョフ(1906-1997)は、動物民話の描き手として活躍した画家でした。生誕120年を記念して、『てぶくろ』の原画を含む、ラチョフの全コレクション作品32点を展示し、その魅力に迫ります。

ラチョフが生きたのは、ふたつの世界大戦と革命、世界初の社会主义国家の誕生と崩壊という激動の時代でした。本展では、ちひろ美術館コレクションのなかから、ラチョフと同時代を生き、伝統的な民衆芸術の様式を民話絵本にいきいきと描き出したマーヴリナ(図1)や、スターリンの独裁が終わり厳しい検閲が解かれた60年代に自由でのびやかな表現で活躍したミトゥーリッチやドゥヴィードフらの作品もあわせて展示します。



図1 タチヤーナ・マーヴリナ  
狼に乗って空を飛ぶイワン王子 1950年

困難な時代の中でも、画家たちは自身の表現の道を模索し、子どもたちに豊かな文化をと願いました。今なお色あせない魅力を放つ東スラブの民話の世界をお楽しみください。

## 動物画家から動物民話の描き手へ

1906年、ロシアのトムスクに生まれたラチョフは、第一次世界大戦で早くに父を亡くすと、手つかずの自然が残されたシベリアの祖母のもとで、野生動物に親しみながら幼少期を過ごしました。

1929年、23歳のラチョフは、キーウの出版社で駆け出しの画家として働き始めます。この時期、旧ソ連では絵本の文化が隆盛を迎え、革新的で優れた絵本が次々に生み出されていました。子どもにこそ妥協なく真の芸術をとつくられた絵本にラチョフは魅了されました。さらにこのころ、ラチョフは編集者から、子どもの本の絵を描くときに大切なふたつのことを教わります。第一に「小さな読者を理解し愛情をもつこと」、第二に「絵をつける文学作品を尊重すること」。当初は模索しながらさまざまなジャンルの絵を描いていたラチョフですが、次第に動

物のテーマに集中していきます。

ラチョフの代名詞ともいえる服を着た動物が初めて登場したのは、1947年刊行の民話集でした。このときラチョフは、従来とは違う描き方をする必要があると強く感じたといいます。民話の動物は単なる動物ではなく、人間関係や人間の性格を暗示・強調する存在と考え、それを表現するために動物たちに民族衣装を着せるというアイデアを思いついたのです。既に動物画家の地位を確立させていたラチョフの新しいアイデアに編集部は驚き反対しましたが、ラチョフは頑として修正を受け入れず、7ヵ月間の検討の末、ようやく出版が決まりました。

する賢いきつねの娘や獐だけれど愚かなおおかみなど、ロシア民話に登場する動物のイメージは、口伝で語られるなかで広く共有されたものでした。ラチョフはこうしたイメージをふくらませ、ロシアの民衆版画(ルボーク)などの要素を下地に、民話の動物たちの本質を子どもにも分かりやすい方法で表現することに努めています。

以後、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ハンガリー、ブルガリア、シベリアの少数民族などの動物民話や童話の挿絵を次々に描いていきました(図2)。



図2 エフゲーニー・ラチョフ  
ロシア民話「きつねとおおかみ」 1963年

## 代表作『てぶくろ』の魅力

絵本『てぶくろ』は、1951年にロシア語で刊行されると好評となり、多くの言語に翻訳されました。日本でも1965年の翻訳出版以来、子どもたちからの絶大な支持を得ています。福音館書店の編集者の松居直は、この絵本の魅力として、精緻で写実的なラチョフの絵に注目しまし



図3・4 エフゲーニー・ラチョフ  
『てぶくろ』(福音館書店)より 1950年

た。「わたしもいれて」と動物たちが入っていくと、手袋は大きく膨らみ、窓や煙突ができ、縫い目がほつれていきます

(図3・4)。この細かな描写が、子どもに受け入れられる絵本のなかのアリティなのだと松居は述べています。<sup>\*1</sup>

2022年、ロシアがウクライナへ軍事侵攻して以来、『てぶくろ』は、ウクライナという国を身近に感じられる絵本、本来相容れぬ性質の動物たちがいっしょに暮らす物語から、共生と平和を考えるきっかけとなる絵本として、再び注目を集めました。ロシアとウクライナ、ふたつの国に暮らし、度重なる戦争を経験したラチョフは、その生涯のほとんどを子どものための本に捧げました。ラチョフはこんなことばを遺しています。「幼い子どもたちが戦

争の悲惨さや恐怖を知ることのないよう

に望みます。

……地球上の

人間はみんな

ほほえむ権利

があるんで

す。」<sup>\*2</sup>

(宗像仁美)



\*1 「絵本を見る目」松居直 日本エディタースクール出版部 1978年

\*2 ラチョフ論「絵本の魔術」松谷さやか 「日本児童文学」第23巻 1977年

# 「戦後80年 ちひろと世界の絵本作家たち 絵本でつなぐ『へいわ』」関連イベント 2025年9月28日(日)内田麟太郎講演会「私の考える平和の絵本」

詩人・絵詞作家の内田麟太郎さんの講演会を、ちひろ美術館・東京の図書室とオンラインで開催しました。一部を紹介します。  
(川澄洋)

## 父親が経験した戦争

私の親父は、戦前プロレタリア文学の詩を書いていたんです。資本主義が巨大になって、その利益の争いが、帝国主義戦争を引き起こす。そのために、国民は子どものころから愛国主義という思想で教育され、国のために死んでいく。親父は私有財産の否定と、天皇制の否定をしていましたから、ずいぶん苦労しました。戦前は治安維持法があったので、思想犯として警察に追われて、被差別部落の人たちの集落でかくまつてもらう経験もした。

親父の詩は、反戦詩でも非戦詩でもなく、ただ戦争は嫌だってことを書いている厭戦詩です。そしてひとつも戦争協力の詩を書かなかったんですよ。でも、ある作家だけがどんなに美しいことをいつても戦争というはあるわけです。芸術家と政治家が、平和の問題で手をつないで、大きな一つの勢力となっていないと、戦争は防げないんですよ。日本の歴史の中には反戦運動はなかった。だか

ら反戦詩もなかった。父親は、我々は戦いに負けたんだといっていました。

## 『ひとのなみだ』<sup>\*1</sup>を書くにあたって

『わたしのワンピース』<sup>\*2</sup>は、絵本の絵が物語の説明書きと思われていた時代に、絵本の世界を切り開いた、絵自体が物語を展開している絵本です。絵本は絵本だという実験をした。でも西巻茅子さんは実験だと考へていなかつたと思います。ただ自分の描きたい絵本を描いた。

私のなかで、いわゆる平和の絵本はかきたくないっていう思いがあつたんです。長新太さんのような絵本を描く人より、平和の絵本を描く人の方が偉いっていう感じを受けたときがあつたんですよ。でも、それはおかしいだろうって。

『わたしのワンピース』や『ゴムあたまポンたろう』<sup>\*3</sup>こそ平和の基礎だと思うんですね。『ひとのなみだ』は初めて出版した非戦絵本ですが、非戦絵本を描いたから特別立派ということはない。時代の要請じゃなく、自分のなかの寄せてきた時代の波があって、書きたくて書いたんです。『ひとのなみだ』がよい絵本だとしたら、nakabanさんがよい絵を描いてくれて、私とふたりで響き合つたからで

す。

## 平和を考えるために

日本人は8月になると、沖縄戦や東京大空襲、広島と長崎の原爆を思いおこす。それは人間が忘れていくことを知っている知恵だと思うんですね。これを禁止したい人たちもいて、一番弱いところへ向かいます。学校や教育委員会にちょっと言ってくれだとか。そのとき、弱いところを孤立させないようにしていくのが大事だろうと。いや、考え方として一番大事なのは、アホでいることですよ。真面目っていうのは危ない。最近SNSで騒ぎになつたり、ことばに対するうざくなつてきているでしょ。私ならいっちゃんとしたもんといえるからいいけど、そうでない人もいますからね。



講演をする内田麟太郎さん

## 「装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子」関連イベント

# 2025年11月22日(土)トークイベント甥夫婦が語る素顔の茨木のり子

『装いの翼』(岩波書店)の著者・行司千絵さんは聞き手となり、詩人・茨木のり子の甥夫婦・宮崎治さんと薫さんからお話をうかがいました。その一部を紹介します。  
(原島恵)

## 伯母・のり子のおしゃれ

行司(以下、行)：ご自宅にのこる服やアクセサリーを見せていただいて、詩人の顔とは別のおしゃれが好きで目利きだったのり子さんの姿が浮かび上がりました。のり子さんのおしゃれは、どんなスタイルだったのですか。

宮崎薫(以下、薫)：身を置く場所とトータルにコーディネートしていた印象があります。普段着るものは、家のなかのテイストとマッチしていました。外で会うときは、ひざ丈のスカートに、ストンとしたジャケットをはおって、大ぶりのブローチやネックレスをつけて。スラッときれいな脚にストッキングを着けてヒールの靴で。それに合うバッグを抱えて、遠くからでも、「あ、のり子さんだ」とわかるたたずまいなんです。目立たないけれど、目立つような。そこだけオーラが違つて見える不思議な魅力でした。



## 美意識の源流

行：のり子さんの美意識の源流はどこにあったのでしょうか。

宮崎治(以下、治)：伯母の家には、国や時代が異なるさまざまなもののが飾つてあるのですが、統一感があるんです。伯母の眼のフィルターを通して買ったものには、ひとつのトーンがあるんです。伯母の詩に「せめて 銀貨の三枚や四枚 いつもちらちらさせていよう 安くて 美しいものたちとの ささやかな邂逅を逃さないために」<sup>\*4</sup>という一節があります。高価なものでなくとも、伯母が見て「これ」というものは、自然に調和するんですよね。

行：そういうアンテナは、スイスへ留学経験のあるお父様や、お父様の医院を継がれた弟様(治さんのお父様)とも共通していたのですか。

治：僕の父が好きなものと、のり子さんのテイストはいっしょでしたね。あと

は、「沼のばばさま」(山形県東田川郡三川に住んでいたのり子の母方の祖母)にもルーツがあったと思います。

薫：子どものときに大きな囲炉裏を囲んで、ばばさまからいろんなお話を聞いていたときの記憶が残っていたんじゃないでしょうか。のり子さんの自宅は無垢の床で、屋根には梁があって、壁はしっくりです。自然素材は長持ちして、朽ちなくて、居心地が良いんですね。できあいのものじゃなくて、何世代にもわたって培われてきた精神のようなものを、のり子さんは上手に發揮されたんでしょうね。やっぱり、表現者ですね。

## 詩人としての茨木のり子

行：詩人・茨木のり子像をどのようにとらえていらっしゃいますか。

治：僕は、伯母が亡くなつて初めて、詩人としての伯母に真正面から向き合いました。詩集を読むと、嘘がなくて、伯母そのものと話をしている感じがします。

薫：私がのり子さんと過ごしたのは16年ほどで、亡くなつてからのお付き合いの方が長くなりました。詩人の魂は、存在し続けるんですね。いなくなつたけど、いなくなつないと感じています。

\*1 『ひとのなみだ』内田麟太郎・文／nakaban・絵 董心社 2024年

\*2 『わたしのワンピース』西巻茅子・著 ごくま社 1969年

\*3 『ゴムあたまポンたろう』長新太・作 董心社 1998年

\*4 茨木のり子『せめて銀貨の三枚や四枚』『見えない配達夫』(飯塚書店) 1958年より

# ひとこと ふたこと みこと



2025年8月28日 (木)

娘の初美術館で来ました。私の母が好きになちひろさんの絵。3世代で楽しみました。ベビーにもやさしい美術館で娘もすごく楽しそうでした。また別の季節に来ます。

10月13日 (月)

ちひろさんがせんそうで大へんな思いをして、絵や文で分かりやすくして、今、せんそうを知らない人が多いからそのためにも絵や文でかいたのかなと思います。

10月25日 (土)

平和がテーマの今回の作品展、ぎりぎりでしたがやっと来ることができました。たくさんの方が、戦争や平和の絵を観て、絵本のページをめくっていました。あらためて、こんなにも平和を願う絵本があったことを知りました。小学校

で読み聞かせでも読んでいましたが、まだまだほんの一部でした。世界のどこかで今日もつらい思いをしている子どもがひとりでも多く笑顔に戻れる日が来ることを願っています。

ないとうあゆみ

11月5日 (水)

今年の8月に来て以来、2度目の訪問です。建物からしてとてもあたたかさを感じるこの美術館がお気に入りの場所になり、もともと好きだった茨木のり子さんの展示ということもあって、またやってきました。展示室1の入口のちひろさんのことば「平和で、豊かで、美しく……」から始まる一節が、とても今の自分に響きました。自分のノートに改めて手書きで書き留めておこうと思います。ちひろさんが武者小路実篤のことばをそ

うしていたように。今回の展示も、心が満たされたものでした。お三方とも、知性や愛情、そしてその人の芯を感じる人でした。

11月24日 (月)

心が落ち着く美術館だなあと思いました。秋に来られてよかったです。私も服づくりの経験がありましたが、あの時代の女性たちにとって服をつくり身にまとうことがどれだけ特別な意味を持っていたかを感じました。

土岐

2026年1月3日 (土)

こんにちは！韓国から来ました。ちひろ先生は初めて知りました！心があたたかくなる作品たちがあつ印象深かったです。韓国へ戻っても作品をずっと探してみるつもりです。明けましておめでとうございます！（※原文は韓国語）

## 美術館 日記



2025年10月31日 (金) ☁/☂

「装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子」展覧会初日。「装い」をテーマに3人の作家を紹介する本展では、老舗京菓子店・塩房軒さんが展示にちなみ3羽の小鳥のお干菓子をつくってくださることに。美術館の絵本フェスではこの期間限定のお干菓子といっしょにオリジナル煎茶を2煎目まで楽しんでいただけるメニューの提供をスタート。おいしいお茶をいれるのに最適のお湯の温度など、スタッフも試行錯誤して準備したメニュー。たくさんのお客さまに味わっていただきたい。



11月22日 (土) ☺

今秋に発売された『茨木のり子全詩集 新版』の編者であり、茨木のり子の甥・宮崎治さんとその妻・薫さんによるトークイベントを開催（詳細は p. 4 活動報告）。イベント終了後には『装いの翼』著者で聞き手の行司千絵さんと宮崎さんのサイン会が行われた。『茨木のり子全詩集 新版』は貼函と布クロス装の美しい造本。手に取るとつくり手の情熱と紙の本の価値が改めて感じられる。

12月15日 (月) ☺

今日はいわさきちひろの誕生日。夕方バッックヤードの3階から、遠くに目を奪われるような夕焼けと富士山を望むことができた。「世界中のこども みんなに 平和としあわせを」と願ったちひろが生きていたら107歳。今の世の中を見たらなにと思うだろうか。当た

り前に夕焼けを眺め、日常のしあわせを感じができるのも平和だからこそ。この穏やかな日々がずっと続くようにと願う。



2026年1月3日 (土) ☺

本年から年始は3日からの開館に。初日の今日は通常の倍くらいのお客さまがご来館くださいました。年始の来館者に感謝を込めて配布する招待特典付き年賀状は、用意した数のほとんどをお配りしました。飛躍や発展のイメージの年。当館を訪れる方たちにとってもよい1年になりますように。

## 風

Vol.13

旬なできごとをピックアップしてお届けします

ちひろ美術館（東京・安曇野）  
収蔵のいわさきちひろ作品9,650点の文字情報が、全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」に登録され、2025年12月9日より公開が始まりました。（URLおよびQRコード参照）

<https://artplatform.go.jp/ja/collections>  
「SHŪZŌ」は、国立アートリサーチセンターが運営し、日本全国の美術館・博物館が収蔵する美術作品を収録するデータベースです（2025年12月時点の協力館223館、収録数472,769件）。国内外の近現代の美術作品の作家名（画家名）、作品名、制作年、材質・技法、寸法等が収録され、収蔵館を

越えて横断検索ができます。

2022年に約70年ぶりに改正された日本の博物館法では、博物館資料のデジタルアーカイブ（電磁的記録）の作成と公開が「博物館の事業」に新たに加えられました。

ちひろ美術館では1990年代後半からデジタルアーカイブに取り組み始め、収蔵品データベースの構築も進めてきましたが、データベースとして作品情報が公開されるのは、今回が初めて。日本語と英語が併記されており、世界中から、ちひろの作品情報に触れる機会が広がりました。

検索手順は簡単です。「SHŪZŌ」にアクセスし、作家名やキーワード、技法などで絞り込みます。たと

えば、作家名「いわさきちひろ」、キーワード「花」、技法「水彩」の3項目で絞り込むと196件（作品）、「水彩」を「鉛筆」に変えると350件が、登録の新しい順に表示されました。（検索結果の「並び順」も制作年順などに変更できます）。

当館は1987年以降の展覧会歴も登録していますので、ぜひ印象に残っている展覧会名でも検索してみてください。

作家名を入れずにキーワードや技法だけで検索すると、抽出作品数は膨大ですが、新たな作家や作品との出会いの場にもなります。ちひろや当館への初めての出会いとなることを期待しています。

（武石香）

# INFORMATION

●次回展示予定 2026年5月15日(金) ~7月20日(月・祝)

## いわさきちひろ「とても素朴なんだけど 大切なものの、それが絵本の中にはあるんです。」

ちひろは生前、エッセイやインタビュー、日記、手帳などに、数々のことばをのこしました。そこには、創作への信念や日々の暮らし、家族への思いなどがつづられています。本展では、ちひろのことばを手がかりに、スケッチや、創作の転機となった『あめのひのるすばん』、平和への願いを込めた『戦火のなかの子どもたち』などの絵本の作品を展示し、ちひろの人物像や画家としての軌跡を紹介します。



いわさきちひろ あごに手をおく少女 1970年

## ちひろ美術館コレクション 魔法の絵本=絵本の魔法

魔法つかいや妖精は本当にいるのでしょうか。もしも、魔法の道具が手に入ったら、あなたなら、どんな願いをかなえますか。ちひろ美術館コレクションから、驚きをもたらす魔法の絵本、そして絵本ならば魔法の世界にご案内します。



ドゥシャン・カーライ（スロバキア）『魔法のなべと魔法のたま』（ほるる出版）より 1989年

## ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧いただきか、お電話にてお問い合わせください。  
TEL.03-3995-0612 chihiro.jp

### 〈展覧会関連イベント〉

#### ●にじみでことりを描いてみよう！

○日時：3月29日（日）  
10:30～15:30

○定員：先着50名

○参加費：500円（入館料別）

○申し込み：当日申し込み（10時より受付、先着順）

ちひろ得意とした水彩技法で、小鳥を描いてみましょう。



いわさきちひろ 赤い小鳥 1971年

#### ●手話通訳つき 対話型ギャラリートーク

○日時：4月4日（土）14:00～15:00

○参加費：無料（入館料別）

○対象：手話を主要なコミュニケーションの手段とする方（ろう者、難聴者、中途失聴者など）のほか、どなたでも

○定員：15名

○申し込み：要事前予約（3/4より公式サイトにて）

展覧会を手話通訳つきで対話しながら鑑賞します。

\*本事業の鑑賞サポートは、「東京文化戦略2030」の取組「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環でアーツカウンシル東京が助成しています。

#### ●講演会 ラチョフと絵本『てぶくろ』の魅力

○日時：4月11日（土）14:00～15:30

○講師：松本猛（ちひろ美術館常任顧問）

○会場：[ちひろ美術館・東京]

定員40名／参加費1000円（入館料別）

[オンライン] 定員100名／参加費700円

○申し込み：要事前予約（3/11より公式サイト、TEL.にて）  
生前のラチョフと交流のあった松本猛が、スライドを使いながら、絵本『てぶくろ』や彼の作品の魅力を語ります。

#### ●松本猛ギャラリートーク

○日時：4月12日（日）14:00～14:40

○講師：松本猛（ちひろ美術館常任顧問）

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

#### ●ギャラリートーク

○日時：第1・3土曜日 14:00～14:30

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

### 〈会期中のイベント〉

#### ●わらべうたあそび

○日時：3月7日（土）11:00～11:40

○講師：服部雅子（西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰）

○参加費：500円（入館料別）

○対象：0～2歳児と保護者

○定員：8組16名／申し込み：要事前予約（2/9より公式サイト、TEL.にて）

#### ●「子どもの権利」ってなんだろう？

○日時：3月8日（日）①10:45～12:00／②14:00～15:30

○講師：一般社団法人 Everybeing 小澤いぶき 他

○参加費：無料（入館料別）

○対象：①5歳～小学生／②中学・高校生

○定員：各回8名

○申し込み：要事前予約（公式サイトにて受付中）

子どもの権利について、絵をみたり、感じたことを話したり、館内を歩いたりしながら考えます。

#### ●ぬいぐるみお泊り会

○日時：お預かりの会 3月28日（土）

○お返し：4月4日（土）～10日（金）

○参加費：500円（入館料別）

○定員：10体 対象：中学生以下の方がお持ちのぬいぐるみ

○申し込み：要事前予約（3/1より公式サイト、TEL.にて）

#### ●絵本のじかん

○日時：第2・4土曜日 11:00～11:30

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

○協力：NCBN（ねりま子どもと本ネットワーク）

**CONTENTS** 〈展示紹介〉ちひろ いつもとなりにー子どもと動物ー…②／生誕120年『てぶくろ』の画家ラチョフと民話絵本の世界…③／〈活動報告〉内田麟太郎 講演会／甥夫婦が語る素顔の茨木のり子…④／ひとことふたことみこと／美術館日記／風…⑤

美術館だより NO.227 発行2026年2月16日

 ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2 TEL.03-3995-0612 テレホンガイド 03-3995-3001 FAX 03-3995-0680